

## 9月のコラム～ 「感じる」ということ

京都国立博物館の「西国三十三所 草創1300年記念 聖地をたずねて」に行きました。元々興味があったわけでもないのですが、声をかけていただいたのも何かの縁。三十三所を回ることは一生涯ないだろうからこれで極楽へ近づけるならと・・・そんな程度だったのですが・・・感動しました。

何百年も前に書かれた美しい文字がそのままの経典、素朴であり華やかでもある精巧な仏像、言い伝えを表した面白い絵巻物。

普段は見るができない需要文化財がそれぞれのお寺から一堂に配されているのですから、当然といえば当然なのですが。

真剣に見すぎて疲れ気味になった頃、なぜか一体の観音様の前で足が止まり、「共にここに居させてもらいたい」という感覚になり、引き込まれてしまいました。こんな出会いがあって嬉しかったです。(ちなみにご紹介すると和歌山県粉河寺の観音立像ということでした。) 記念にと、ミュージアムショップで、その仏像が印刷されたカードを見つけたのですが、どうも違う。もう一度確かめに会場に戻ったのですが、間違えているわけではない。でも、受ける印象は、全く別物なのです。伝わってきた深みのあるやさしさは感じられず無表情ともいえるお姿。角度のせい(実物は見上げるが、写真は正面から)もあると思いますが、これこそ生の力なのだろうと思います。

仏像は、込められた思いが特に強いのだと思いますが、美術展に行ってもなぜか惹かれる特別の1枚の絵があり、もっと日常でも、店先にたくさん並んでいる商品の中で、「私を呼んでいる」と感じる一つがあります。

この感覚は、一体何なんでしょうね。

新型コロナウイルスのせいで、人と会う機会が激減しました。セミナーや講演会もWEBがほとんどで、講師の先生のオーラやエネルギーを感じるができなくなりました。息遣いや体温、映像では捕らえることのできない微かな動き。見る・聞くより「感じる」ということは、意外と人に大きな影響を与えているのかもしれない。

これからもデジタル化は加速していくでしょう。これからの世界に育つ人は、どうやって「感じる」という感覚や感性を磨いていくのでしょうか。それともそういった能力は必要でなくなり退化しても問題なくなるのでしょうか。おそらくかつて原始の人々が持っていたであろう能力を失った私たちが、特に不自由を感じることなく生きているように・・・

悠久の時の中にならざる存在する宝物に囲まれてそんなことを思いました。

2020年9月 水田かほる